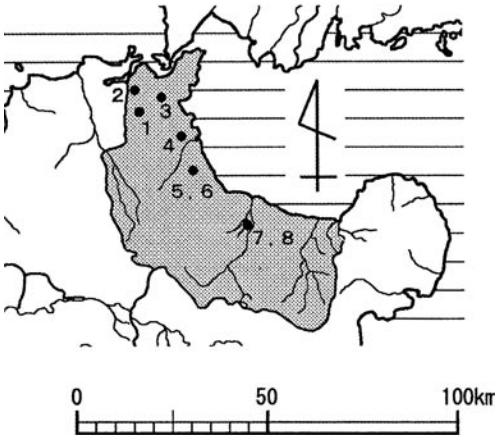
『河瀬正利先生退官記念論文集　考古論集』所収

副葬品配置における左右の意味について
―豊前地域の弥生時代後期を中心として―

加藤　徹

１．はじめに

副葬品配置に関する代表的な研究としては、小林行雄を初めとして、今尾文昭・寺沢知子・用田政晴らの、古墳における副葬品の棺内外配置に着目した論考や、光本順の副葬品配置の意味を考えた論考を挙げることができる。[(1)] 一方､弥生時代の副葬品研究では、この種の研究は活発ではなく、丹後地域を中心とした鉇の副葬位置を取り上げた福島孝行の研究を挙げる程度に留まる。[(2)] このような状況の中で、弥生時代においては高倉洋彰の研究にみるような“右手の不使用”が指摘されているものの、副葬品配置における左右の意味に関して論及したものは轟次雄の研究以外に知られていない。[(3)] 轟は副葬品の左右の配置を男女の性差という観点から研究したが、それは刀子を副葬する被葬者が女性という仮説を前提にしており、左右の配置の意味を明確にすることを必ずしも目的としていない点が指摘できる。したがって、本論では副葬品配置における左右の意味について考えてみることとする。[(4)] 対象とする地域と時期については、多くの墓から副葬品が出土する、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の豊前地域を中心とし、以下、検討を行ってみたい。



第１図　遺跡分布図
１．高津尾遺跡 16 区南地区、２．郷屋遺跡Ｂ・Ｃ地点、３．山崎八ヶ尻墳丘墓、４．岩屋６・７号墳、５・６徳永川ノ上遺跡 C/E 地区、７．穴ヶ葉山遺跡、８．金居塚遺跡

２．遺跡の様相および方法論的見解

本稿で対象とする豊前地域の遺跡で左右が判明する主なものとして、第１図および第１－１～３表に示すように８遺跡がある。[(5)] これらの遺跡は弥生時代の後期後半頃～古墳時代初頭頃までに属する遺跡であるが、当地域ではこれよりも古い遺跡において副葬品はあまりみられない。これらの遺跡の中で高津尾遺跡 16 区南地区・徳永川ノ上遺跡Ｃ地区・穴ヶ葉山遺跡は埋葬施設

第１－１表　各遺跡における諸要素一覧（１）

遺構名	棺形態	棺長	共伴品	器種	配置位置
高津尾遺跡　16区南地区					
1号墓	箱形石棺		鉇・管玉	鉇	棺内？
2号墓	箱形石棺	187	鉇（2）	鉇	A
				鉇片	棺内？
3号墓	箱形石棺	173		素環頭刀子	A
5号墓	箱形石棺	177		鉇	B
10号墓	箱形石棺	171		鉇	B
11号墓	箱形石棺	78		鉇	A
12号墓	箱形石棺	174	鏡、鉄鏃（2）、刀子（2）	鏡	B
				鉄鏃（2）	b
				刀子	A
				刀子	B
13号墓	箱形石棺	140		鉇	A
15号墓	箱形石棺	182	鉄鏃（2）、管玉（3）	鉄鏃（2）	B
17号墓	箱形石棺	156		鏡	B
22号墓	箱形石棺	162		刀子	A
23号墓	箱形石棺	189		鉇	B
24号墓	箱形石棺	190	鉇、管玉（2）	鉇	B
25号墓	箱形石棺	157	刀子、鉇	刀子	A
				鉇	棺外
28号墓	箱形石棺	165	刀子、袋状鉄斧	刀子	C
				袋状鉄斧	C
29号墓	箱形木棺	170		鉄鎌	a
30号墓	石蓋土壙	156		刀子	A
34号墓	箱形石棺	166		鉇	B
35号墓	石蓋土壙	165		鉇	A
39号墓	石蓋土壙		鉄鏃、刀子	鉄鏃	b
				刀子	A
41号墓	箱形石棺？			鉄剣	B
42号墓	土壙	167	鉇、小玉（53）	鉇	A
郷屋遺跡B・C地点					
B地点　S－1箱形石棺墓	箱形石棺	167		鉇	A
B地点　S－2箱形石棺墓	箱形石棺	112	刀子、管玉（50）	刀子	A
B地点　S－3箱形石棺墓	箱形石棺	200		鉇	A
B地点　S－4箱形石棺墓	箱形石棺	89		鉇	棺内
B地点　S－5箱形石棺墓	箱形石棺	106		素環頭刀子	A
B地点　D－1石蓋土壙墓	石蓋土壙	101	鉄鏃（2）、鉇	鉄鏃（2）	b
				鉇	b
B地点　D－2石蓋土壙墓	石蓋土壙	164	刀子、鋤・鍬先	刀子	A
				鋤・鍬先	a
C地点　S－1箱形石棺墓	箱形石棺	110	刀子、貝輪、管玉	貝輪	B
				刀子	A
C地点　S－2箱形石棺墓	箱形石棺	129	鏡、素環頭刀	鏡	棺内
				素環頭刀	
C地点　S—4箱形石棺墓	箱形石棺			鉄鏃	棺内？
山崎八ヶ尻墳丘墓					
2号石蓋土壙墓	石蓋土壙	118		鉇	A
4号石蓋土壙墓	石蓋土壙	158	鏡、刀子（2）	鏡	B
				刀子（2）	B
徳永川ノ上遺跡（C地区）					
Ⅰ－5号墓	木蓋土壙	178		鉄剣	A
Ⅰ－6号墓	木蓋土壙	171	鏡、鉄鏃、刀子、素環頭刀子	鏡	C
				鉄鏃	B
				刀子	A
				素環頭刀子	A
Ⅰ－8号墓	木蓋土壙	163	鏡片、刀子、勾玉、管玉（4）、丸玉、小玉（130）	鏡片	B
				刀子	A
Ⅰ－11号墓	木蓋土壙	177		鉄鏃	b

＊凡例：A・a＝右側、B・b＝左側、C・c＝中央、それぞれ大文字が棺内、小文字が棺外を示す（以下同）

第１－２表　各遺跡における諸要素一覧（２）

遺構名	棺形態	棺長	共伴品	器種	配置位置
徳永川ノ上遺跡(C地区)					
Ⅰ－13号墓	木蓋土壙		刀子(2)、勾玉、管玉(13)、丸玉、小玉(19)	刀子	B
				刀子	A
Ⅱ－15号墓	石蓋土壙	177		刀子	A
Ⅲ－18号墓	木蓋土壙	173		刀子	A
Ⅳ－19号墓	石蓋土壙	174	鏡、刀子	鏡	A
				刀子	棺内？
Ⅳ－20号墓	木蓋土壙	164	刀子、勾玉、管玉、小玉(10)	刀子	A
Ⅳ－21号墓	箱形石棺	178		刀子(2)	棺内？
Ⅴ－22号墓	箱形石棺	167		刀子	A
Ⅴ－24号墓	箱形石棺	163		刀子	B
Ⅴ－2号甕棺墓	土器棺		鉄鏃、刀子	鉄鏃	棺内
				刀子	棺内
Ⅵ－42号墓	石蓋土壙	202	鉄鏃(2)、刀子、釣針(5)	鉄鏃	A
				鉄鏃	b
				刀子	A
				釣針(5)	b
Ⅶ－43号墓	石蓋土壙	160		素環頭刀子	a
Ⅶ－44号墓	石蓋土壙	152	鉄鏃、素環頭刀子	鉄鏃	棺外？
				素環頭刀子	a
Ⅶ－53号墓	木蓋土壙	175	鉄鏃、鉇	鉄鏃	B
				鉇	B
Ⅷ－27号墓	木蓋土壙	182		鉄鏃(2)	B
Ⅸ－31号墓	箱形石棺	207	鉄鏃(2)、刀子	鉄鏃(2)	B
				刀子	A
Ⅸ－32号墓	箱形石棺	185		刀子	棺内？
Ⅹ－35号墓	箱形石棺	184	鉇、袋状鉄斧	鉇	B
				袋状鉄斧	b
Ⅹ－41号墓	石蓋土壙	169		摘鎌	B
ⅰ-62号墓	土壙	66		刀子	B
徳永川ノ上遺跡(E地区)					
2号墳丘墓　1号棺	箱形石棺	183	鏡片、刀子、小玉(32)	鏡片	B
				刀子	B
3号墳丘墓　1号棺	箱形石棺	160		鉄鏃(2)	棺内？
3号墳丘墓　3号棺	土器棺		刀子、小玉(21)	刀子	棺外
3号墳丘墓　4号棺	石蓋土壙	156		鉄鏃	B
4号墳丘墓　1号巻	箱形石棺	174	刀子、鉇	刀子	B
				鉇	？
4号墳丘墓　3号棺	箱形石棺	175	鉄剣、鉄鏃(2)	鉄剣	A
				鉄鏃(2)	B
4号墳丘墓　4号棺	箱形石棺	185	鏡、素環頭刀子、勾玉、管玉(29？)	鏡	A
				素環頭刀子	B
穴ヶ葉山遺跡					
2号石蓋土壙墓	石蓋土壙	205		刀子	A
3号石蓋土壙墓	石蓋土壙	117		鉇	A
5号石蓋土壙墓	石蓋土壙	159		刀子	B
6号石蓋土壙墓	石蓋土壙	172		鉇	B
11号墓	石蓋土壙	172	刀子、管玉(4)、切子玉、小玉(3)	刀子	A
12a号墓	石蓋土壙	187		鉇	B
12b号墓	石蓋土壙	192		鉇	a
14号墓	石蓋土壙	169		鉇	B
15号墓	石蓋土壙	173		鉇	a
18号墓	石蓋土壙	172		刀子	A
20号墓	石蓋土壙	176		鉇	a
21号墓	石蓋土壙	172		鉇	B
23号墓	石蓋土壙	181	刀子、勾玉、管玉(13)、小玉(7)	刀子	B
26号墓	石蓋土壙	174	鉄鎗、素環頭刀子、鉇	鉄鎗	A
				素環頭刀子	A
				鉇	B

第１－３表　各遺跡における諸要素一覧（３）

遺構名	棺形態	棺長	共伴品	器種	配置位置
穴ヶ葉山遺跡					
30号墓	石蓋土壙	94	鉇、小玉(5)	鉇	C
34号墓	石蓋土壙	181		刀子	?
35号墓	石蓋土壙	174		鉇	a
37号墓	石蓋土壙	181		鉇	B
38号墓	石蓋土壙	201		鉄鏃(鑿？)	棺外
40号墓	石蓋土壙	170		鏡片	B
42号墓	石蓋土壙	202		素環頭刀子	a
43号墓	石蓋土壙	161		鉄鏃	A
44号墓	石蓋土壙	176		素環頭刀子	A
49号墓	石蓋土壙	166		刀子？	A
50号墓	石蓋土壙	203		刀子	A
51号墓	石蓋土壙	160		鉄剣	A
56号墓	石蓋土壙	110		鉇	A
57号墓	石蓋土壙	188		刀子	B
66号墓	石蓋土壙	184		鋤・鍬先	b
67号墓	石蓋土壙	188		刀子	A
72号墓	石蓋土壙	188		鉇	b
73号墓	石蓋土壙	134		刀子	A
78号墓	石蓋土壙	100		素環頭刀子	A
79号墓	石蓋土壙	191		鉇	c
82号墓	石蓋土壙	102		鉇	A
83号墓	石蓋土壙	174		刀子	A
84号墓	石蓋土壙	204	鉄鏃、刀子	鉄鏃	B
				刀子	A
金居塚遺跡					
10号石蓋土壙墓	石蓋土壙	165		鉇	A
13号石蓋土壙墓	石蓋土壙	174		鉄鏃(2)	A
14号石蓋土壙墓	石蓋土壙	172		刀子	b
10号土壙墓	土壙	168		鉄鏃	b
岩屋古墳群					
6号墳　第1主体	箱形石棺	181		鉄剣	B
6号墳　第2主体	箱形木棺	167		刀子	A
7号墳　第1主体	箱形石棺	160		鉄剣	B

の数が多く、比較的密集した形態をとるグループ、郷屋遺跡Ｂ・Ｃ地点・山崎八ヶ尻墳丘墓・岩屋古墳６・７号墳・徳永川ノ上遺跡Ｅ地区のように古墳あるいは墳丘墓を中心とするグループがある。後者のような特定個人あるいは特定集団墓だけでなく、前者のような集団墓においても１埋葬施設に１点程度の鉄器を基本とした副葬形態をとっている。

続いて副葬品の左右配置を検討する上での方法論について若干説明を加えておく。左右の配置の背景としては、研究史上からみてもいまだ明らかにされていないが、大きくは１．副葬品の器種あるいはその機能による区分、２．被葬者個人による区分、３．被葬者の社会的属性による区分とが想定できる。これらを構成する小区分として、器種による場合では①器種、②棺内外の位置、③副葬品組成など、被葬者個人による場合では④年齢、⑤性別、⑥“利き手”などが考えられ、被葬者の社会的属性による場合には⑦出自、⑧階層などの合計８つの要素が考えられる。しかし、この８つの要素の中で、⑤の性別に関しては、副葬品を伴う人骨の例が少なく、検討には不十分であるため検討の対象としては除外せざるを得ない。また、⑥の“利き手”に関しても同様で、これを検

討することは不可能であるので除外する。したがって、この２要素を除いた６要素について検討を行う。また、この他に、年齢は棺長[(6)]から、出自は棺形態[(7)]から検討を行い、階層は遺跡内における埋葬施設の位置や副葬品器種との関係を考慮しながらそれぞれ検討を行うこととする。

３．諸要素の検討

（１）器種からみた左右の配置状況

第２表のように地域内を総合的にみた場合、左右の配置比率には特徴があることがわかる。まず、鏡と鉄鏃は左側配置が多くみられる。鉄鏃と同じ武器類の鉄剣（ここでは鉄鎗１点を含む。以下同）では、左と右はほぼ同数存在するが、遺跡によりその配置は異なっている。次に工具類においては、鉇がほぼ左右同数であるのをはじめとして、刀子、素環頭刀子の順に右側配置が多くなっている。これ以外の数的に少ない生産具（工具・農具・漁具）では比較的左側に配置されることが多いようである。またこの状況は、第３表で遺跡ごとにみてもおおよそ同様な傾向にあるということができる。したがって、鉄剣と鉇を除く器種では、それぞれの器種ごとに左右の配置がほぼきまっている可能性が高いといえよう。

（２）棺内外の位置からみた左右の配置状況

地域内で総合的にみた場合、第４表のように鏡・鉄剣・刀子が基本的に棺内副葬であるのに対して、その他の器種では棺外配置がほぼ20%以上を占めているという違いはあるものの、（１）でみたような各器種での配置と同様な傾向にある。しかし、第５表のように各遺跡で個別に見た場合には、郷屋遺

第２表　器種別左右配置状況

器種	右	中央	左	不明	合計
鏡	2 (22.2%)	1 (11.1%)	6 (66.7%)		9 (100%)
貝輪			1 (100%)		1 (100%)
鉄剣	4 (57.1%)		3 (42.9%)		7 (100%)
鉄鏃	3 (13.6%)		14 (63.6%)	5 (22.7%)	22 (100%)
素環頭刀子	9 (81.8%)		1 (9.1%)	1 (9.1%)	11 (100%)
刀子	27 (62.8%)		11 (25.6%)	5 (11.6%)	43 (100%)
ヤリガンナ	16 (42.1%)	2 (5.2%)	15 (39.5%)	5 (13.2%)	38 (100%)
袋状鉄斧		1 (50%)	1 (50%)		2 (100%)
鉄鎌	1 (100%)				1 (100%)
摘鎌			1 (100%)		1 (100%)
鋤・鍬先	1 (50%)		1 (50%)		2 (100%)
釣針			1 (100%)		1 (100%)

第３表　遺跡別左右配置状況

遺跡名	鏡		鉄剣		鉄鏃		素環頭刀子		刀子		鉇	
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
高津尾遺跡16区南地区		2		1		3	1		5	1	5	5
郷屋遺跡B・C地点						1	1		3		2	1
山崎八ヶ尻墳丘墓		1								1	1	
徳永川ノ上遺跡C地区	1	1	1		1	6	3		9	3		2
徳永川ノ上遺跡E地区	1	1	1			2		1		2		
穴ヶ葉山遺跡		1	2		1	1	4		9	3	7	7
金居塚遺跡					1	1				1	1	
岩屋古墳6・7号墳				2					1			

第４表　器種別左右配置状況（１）（棺内外別）

器種	A	C	B	計	a	c	b	計
鏡	2 (22.2%)	1 (11.1%)	6 (66.7%)	9 (100%)				
貝輪			1 (100%)	1 (100%)				
鉄剣	4 (57.1%)		3 (42.9%)	7 (100%)				
鉄鏃	3 (13.6%)		8 (36.4%)	12 (50%)			6 (27.3%)	6 (27.3%)
素環頭刀子	6 (54.5%)		1 (9.1%)	7 (63.6%)	3 (27.3%)			3 (27.3%)
刀子	27 (62.8%)		10 (23.3%)	37 (86.1%)			1 (2.3%)	1 (2.3%)
鉇	12 (31.6%)	1 (2.6%)	13 (34.2%)	26 (68.4%)	4 (10.5%)	1 (2.6%)	2 (5.3%)	7 (18.4%)
袋状鉄斧		1 (50.0%)		1 (50.0%)			1 (50%)	1 (50%)
鉄鎌					1 (100%)			1 (100%)
摘鎌			1 (100%)	1 (100%)				
鋤・鍬先					1 (50%)		1 (50%)	2 (100%)
釣針							1 (100%)	1 (100%)

第５表　遺跡別左右配置状況（２）（棺内外別）

遺跡名	鏡				鉄剣				鉄鏃				素環頭刀子				刀子				鉇			
	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b
高津尾遺跡16区南地区		2				1				1		2	1				5	1			5	5		
郷屋遺跡B・C地点												1	1				3				2			1
山崎八ヶ尻墳丘墓		1																1			1			
徳永川ノ上遺跡C地区	1	1			1				1	4		2	1		2		9	3				2		
徳永川ノ上遺跡E地区	1	1			1					2				1				2						
穴ヶ葉山遺跡		1			2				1	1			4				9	3			3	6	4	1
金居塚遺跡									1			1								1	1			
岩屋古墳6・7号墳						2											1							

跡の鉄鏃・鉇、穴ヶ葉山遺跡の鉇[8]、金居塚遺跡の鉄鏃などのように、棺の内外の配置では左右が逆転する現象がみられる。特に金居塚遺跡では、遺跡全体でみても棺内は右側配置、棺外は左側配置で統一されている。この他の遺跡では棺外では左側に配置する傾向が強い。また、数的に少ない生産具では、高津尾遺跡 16 区南地区 28 号墓の袋状鉄斧と徳永川ノ上遺跡Ｃ地区Ⅺ－ 62 号墓の摘鎌を除くとすべて棺外配置であり、またその中でも左側配置が多くみられる。

以上のように、棺内外の位置で見た場合、器種別の左右配置ほどには統一性を見出すことはできないが、棺外に位置する副葬品は左側に配置する傾向があることを指摘できる。

（３）副葬品組成からみた左右の配置状況

複数器種を副葬している例をみると、高津尾遺跡 16 区南地区 39 号墓や徳永川ノ上遺跡Ｃ地区Ⅵ－ 42 号墓などは前述したように棺内外で左右反対の配置をとっている。これら以外では、（１）でみたように、器種ごとで異なった配置をとっている。例外として、徳永川ノ上遺跡Ｅ地区の４号墳丘墓４号棺において、鏡・素環頭刀子が基本的な配置とは逆の配置となっている[9]。この他には、刀子が２点出土している場合には、１点は左側、もう１点は右側に配置する例があり、区別されていた可能性がある（高津尾遺跡 16 区南地区 12 号墓、徳永川ノ上遺跡Ｃ地区Ⅰ－ 13 号墓）。また、これとともに、鏡と刀子が共伴する場合に刀子が左側に配置される例（高津尾遺跡 16 区南地区 12 号墓、山崎八ヶ尻墳丘墓４号石蓋土壙墓、徳永川ノ上遺跡Ｅ地区２号墳丘墓１号棺）があることからも、

刀子が左側に配置される場合には、特別な意味を持つ可能性が高いといえる。

以上のことから、副葬品の配置は、やはり前述の（１）の器種、あるいは（２）の棺内外の位置に準じていることがわかる。但し、刀子に関しては、器種組成と配置から、左側配置には特別な意味があった可能性がある。

（４）棺長からみた左右の配置状況

地域内を総合的に見た場合、第６表のようにほとんどの副葬品は大型棺に副葬されていることがわかる。小～中型棺に副葬されている器種の中でも、左右の配置は器種による区別以上の差は見出せない。但し、穴ヶ葉山遺跡の鉇をもつ埋葬施設の中で、右側に配置する例に関しては、小型棺と大型棺で差がみられる。それは小型棺の３号石蓋土壙墓（棺長 117cm）・56 号墓（同 110cm）・82 号墓（102cm）では棺内に配置し、大型棺の 12 b 号墓（棺長 192cm）・15 号墓（棺長 173cm）・20 号墓（同 176cm）・35 号墓（同 174cm）では棺外に配置している点である。したがって、このような例からすると、棺長による区分は、左右というより、棺内外の配置の差に表われている可能性がある。

以上のように、棺長、すなわち年齢が左右の配置に影響を与えている可能性は低いということが指摘できる。穴ヶ葉山遺跡の例からすると、棺長は左右よりも棺内外の配置に影響を与えている可能性もあるが、他ではあまり明瞭に差がみられないため、それ以上についての言及は難しい。

第６表　器種別左右配置状況（３）（棺長別）

器種	小型棺				中型棺				大型棺			
	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b
鏡									2	6		
貝輪		1										
鉄剣									4	2		
鉄鏃				1					3	8		5
素環頭刀子	2								4	1	3	
刀子	3	1							21	7		1
鉇	5			1	1				6	13	4	1
袋状鉄斧												1
鉄鎌											1	
摘鎌										1		
鋤・鍬先											1	1
釣針												1

（５）棺形態からみた左右の配置状況

地域内を総合的に見た場合、第７表のように棺の形態が左右の配置に与える影響は小さいと考えることができる。また、これは埋葬施設のほぼすべてが石蓋土壙で構成される穴ヶ葉山遺跡において、左右の配置が統一されて

第７表　器種別左右配置状況（４）（棺形態別）

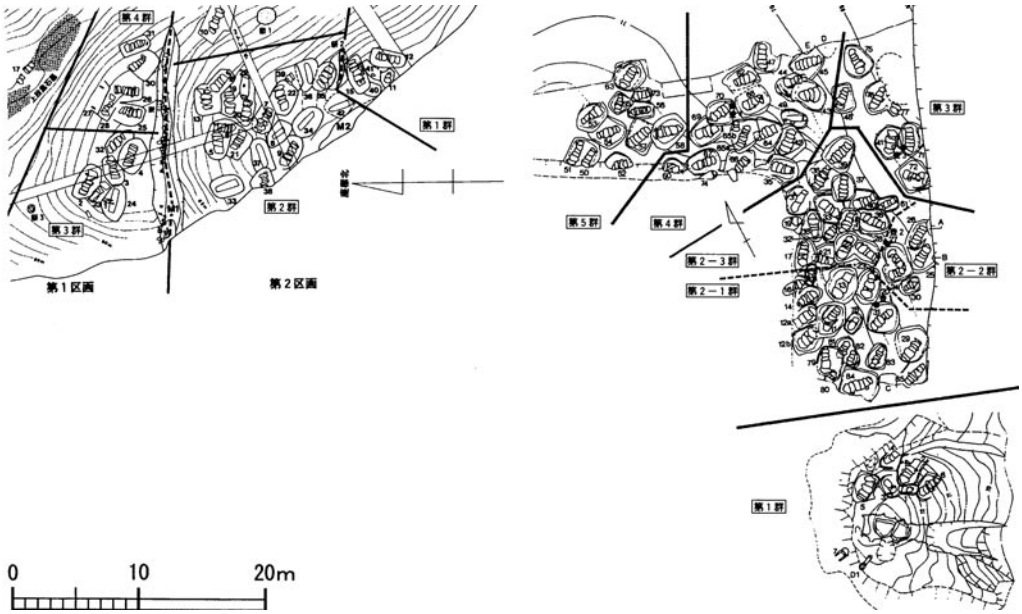
器種	土壙				石蓋土壙				木蓋土壙				箱形木棺				箱型石棺			
	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b	A	B	a	b
鏡					1	2				1							1	3		
貝輪																		1		
鉄剣					2												1	3		
鉄鏃				1	3	2		3		3		1						3		1
素環頭刀子					3		3			1							2	1		
刀子		1			14	4		1	5	1			1				7	4		
鉇	1				6	6	4	2		1							5	6		
袋状鉄斧																				1
鉄鎌															1					
摘鎌						1														
鋤・鍬先							1	1												
釣針								1												

いないことからも首肯できよう。この中で、鉄剣は石蓋土壙では右側配置であるのに対して、箱式石棺では左側配置が数的に優位になることや、また鉄鏃も同様に石蓋土壙のみに右側配置がみられる点において他とは若干様相が異なる。但し、鉄剣については、既述のように各遺跡により配置が異なっているので、ただちに棺形態と左右の配置を結びつけることができない点には注意が必要である。鉄鏃の右側配置は徳永川ノ上遺跡C地区・穴ヶ葉山遺跡・金居塚遺跡でみられるが、穴ヶ葉山遺跡例は同じ石蓋土壙に左側配置が存在する。ほかの２遺跡のうち、徳永川ノ上遺跡C地区Ⅵ－42号墓では棺内の鉄鏃は右側、棺外の鉄鏃は左側というように、左右の差は棺内外の位置によるものであろう。残る金居塚遺跡では、土壙と石蓋土壙で左右の差がみられるが、当遺跡は既述のように、遺跡全体において棺内外で左右の差が存在している事を考えると、棺形態の差の影響は小さいということができる。また、石蓋土壙と箱式石棺とでは棺内外の配置にも差がみられるが、これも穴ヶ葉山遺跡の例から考えると、必ずしも棺内外の配置に影響を与えているとは考え難い。

以上のように、棺形態が左右の配置に与える影響は小さいといえよう。また、棺内外の配置に影響を与えている可能性も少なく、棺形態と副葬品配置との関係は弱いと考えられる。これは既述のように、ここでは出自による影響が小さいものと想定したい。[(10)]

（６）埋葬施設の配置からみた左右の配置状況

ここでは、副葬品を有する多数の埋葬施設が造営されている遺跡を中心として、これ



第２図　墳墓群設定図（縮尺１/600、註（5）の各報告書より一部改変）
（左：高津尾遺跡16区南地区、右：穴ヶ葉山遺跡）

らの埋葬施設の位置と左右の配置状況について検討していく。

①高津尾遺跡 16 区南地区（第２・３図）

当遺跡では、埋葬施設間の空間および溝（Ｍ１）・祭祀土壙（祭２）の状況や、遺跡内における副葬品の在り方から、おおよそ５つの墓群に分けることができる。第１群には他の墓群で見られる鉄鏃・刀子・鉇などとともに、鏡や鉄剣を左側に配置している埋葬施設が近接して造られている。この中では 12 号墓の刀子２点のうちの１点と、鉇が右側配置である。第２群では、鉇を中心として、鉄鏃・刀子・鉄鎌が見られる。鉇２点と鉄鏃１点を除くと他はすべて右側配置である。第３・４群はＭ１によって他とは区別されているが、その副葬品内容においてもまた、他とは異なる。第３群では１点の素環頭刀子を除くと他はすべて鉇であり、第４群では刀子が基本として含まれ、それに共伴する形で鉇・袋状鉄斧がみられる。この中では、第４群において棺床面下中央という特別な出土状態である 28 号墓例を除くと、他は右側配置である。一方、第３群では鉇３点のうち２点が左側配置である。この他には、周辺にやや離れて位置する 10 号墓・17 号墓に鏡・鉇が左側に配置されている。

②郷屋遺跡Ｂ・Ｃ地点（第３図）

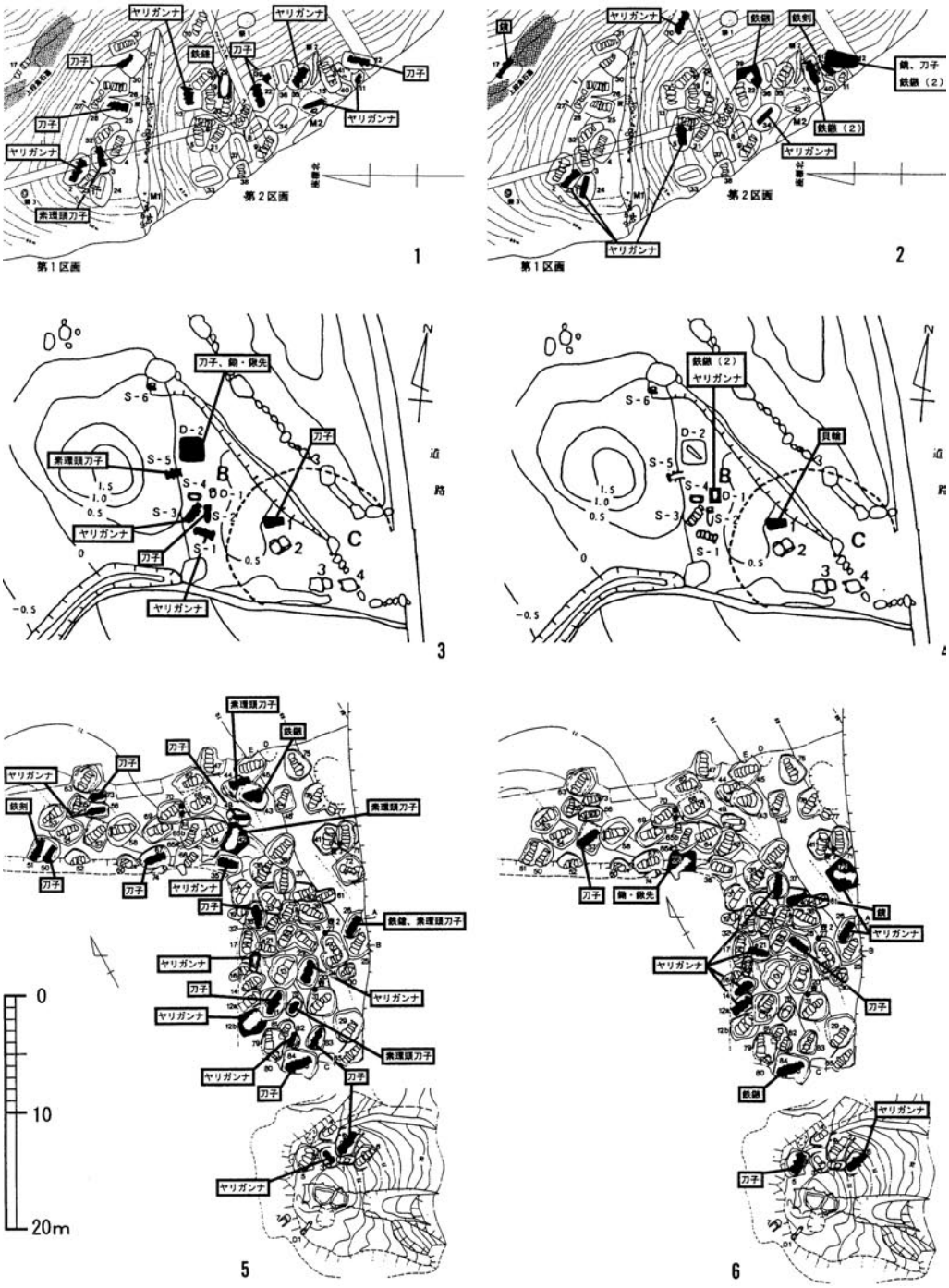
当遺跡では、Ｃ地点の３基の埋葬施設の内２基は、配置が不明である点は問題であるが、判明しているＣ地点Ｓ－１箱式石棺墓では、貝輪が左側、刀子が右側に配置されている。一方、周辺にあたるＢ地点ではＤ－１石蓋土壙墓を除くほかはすべて右側配置となっている。

③徳永川ノ上遺跡Ｃ地区（第４図）

当遺跡での左右の配置のあり方には次のような特徴を指摘することができる。まず、南東端付近にⅠ号墳墓群が左右両方に副葬品を配置している。この中では、鉄剣･刀子･素環頭刀子が右側配置であり、鏡・鉄鏃・刀子が左側配置となっている。次にⅢ・Ⅳ号墳墓群やⅦ号墳墓群の東側の一群のような、調査区の中央付近を中心とした埋葬施設において、刀子を主体とした右側配置が優位となっている。ここでは、左側配置が一般的である鏡が右側に配置されている点が特徴である。そして、Ⅵ号墳墓群とⅦ号墳墓群の西側、Ⅷ～Ⅺ号墳墓群では左側を基本とした配置となっている。この左側配置が基本の１群では、他の墓群ではみられない鉇・袋状鉄斧・摘鎌・釣針などが見られる点に特徴がある。

④穴ヶ葉山遺跡（第２～３図）

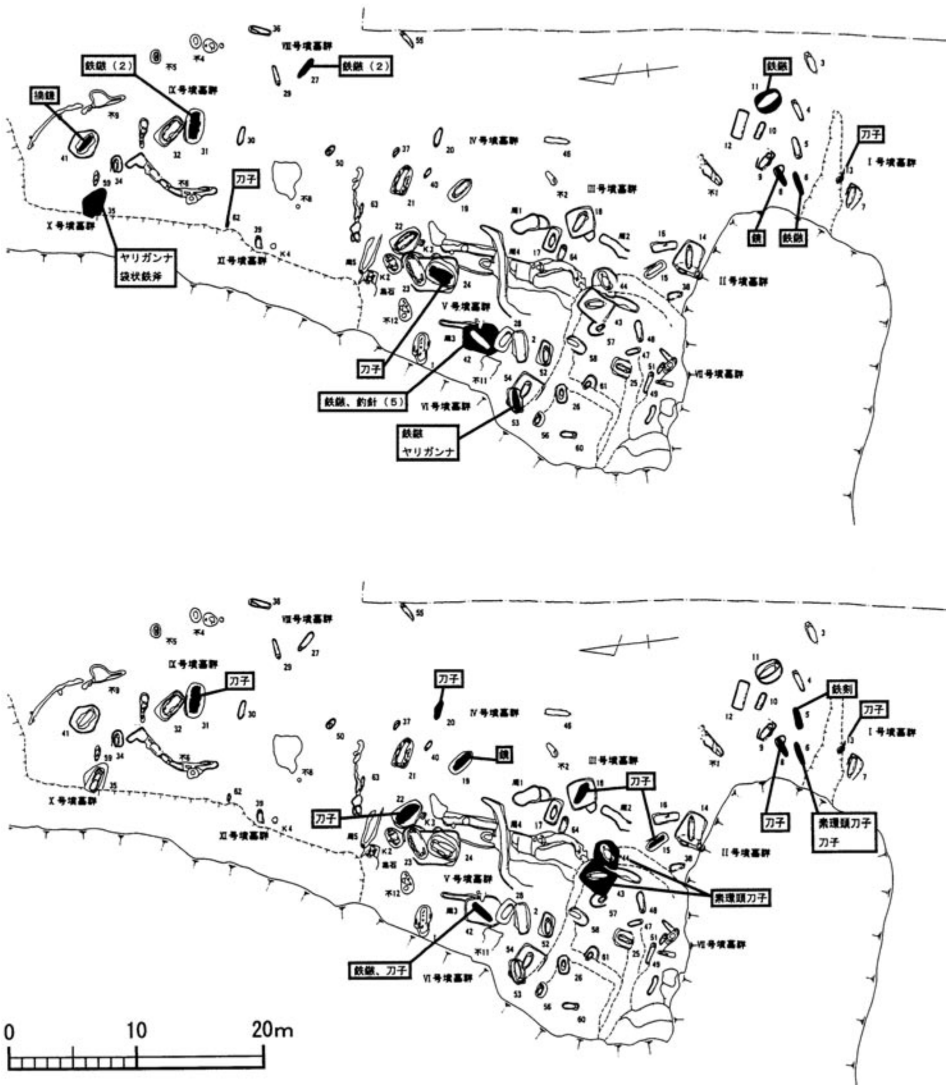
当遺跡では、左右の配置は複雑な様相を呈している。詳細にみるために、高津尾遺跡 16 区南地区と同様に、墓群に分けてみる。副葬品のあり方や埋葬施設の分布状況から、第２図のようにおおよそ５群に分けることができる。また、第２群に関しては、さらに



第３図　左右別にみた遺跡内における副葬品および埋葬施設の配置状況（１）

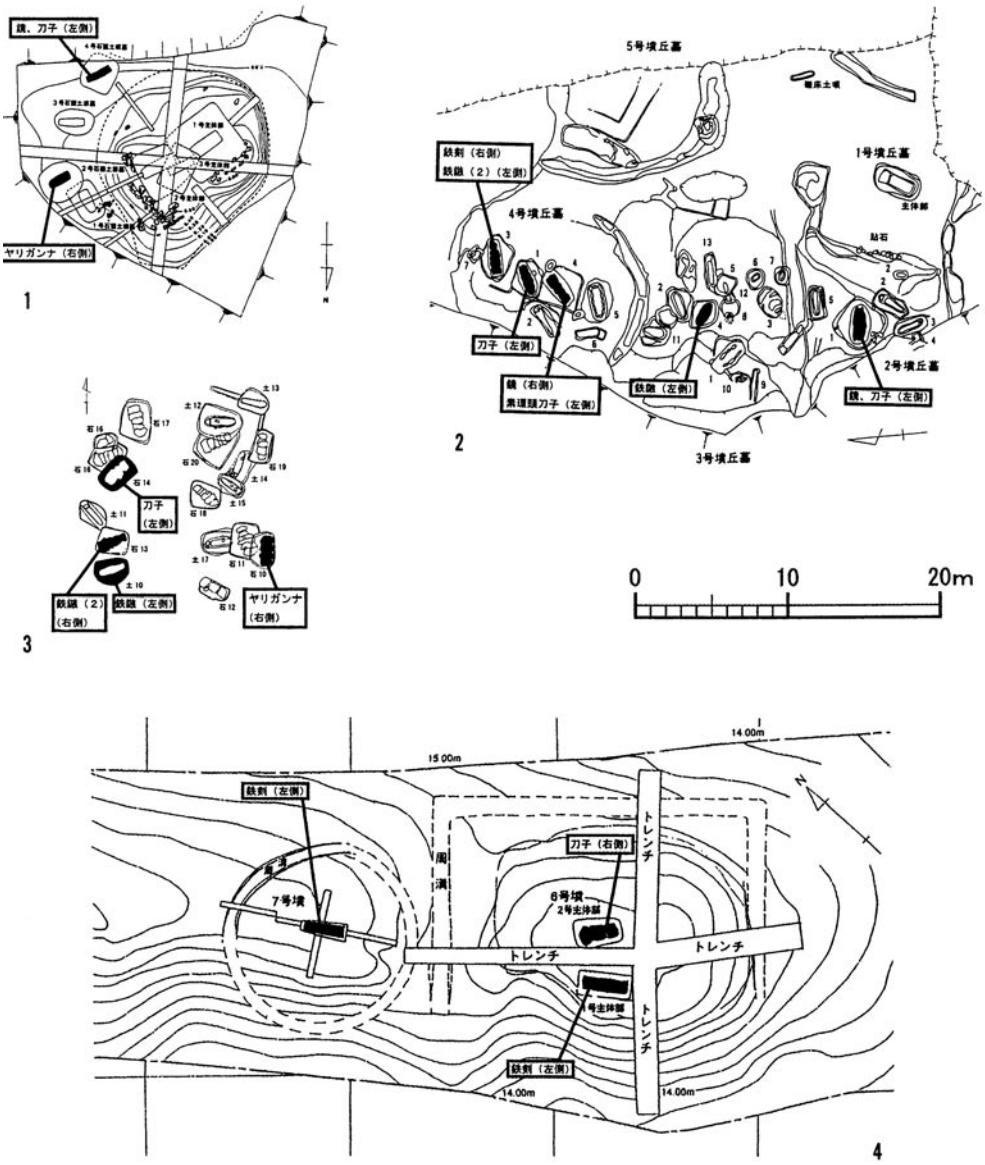
（縮尺１/600、註 (5) の各報告書より一部改変）

１・２高津尾遺跡 16 区南地区、３・４郷屋遺跡Ｂ･Ｃ地区、５・６穴ヶ葉山遺跡、※１・３・５が右側配置、２・４・６が左側配置である。また、棺部分の黒塗りが棺内出土、棺周囲の黒塗りは棺外出土を示す。



第４図　左右別にみた遺跡内における副葬品および埋葬施設の配置状況（２）
（徳永川ノ上遺跡Ｃ地区）（縮尺１/600、註 (5) より一部改変）
（上：左側配置、下：右側配置）
（棺部分の黒塗りが棺内出土、棺周囲の黒塗りが棺外出土を示す。）

３つの小群に分けることができると思われる。これを元に各墓群別の状況をみると、第２群を除いた場合、以下のような特徴が指摘できよう。まず、刀子と鉇では、各墓群で複数の埋葬施設に副葬されている場合、刀子では１基、鉇では１～２基程度が左側配置されている他は、基本的に右側に配置されている。第２群全体では左側配置が他の墓群に比べて多くなっている。これを３群に分けて考えた場合、第２－１・２群では、他の墓群と同様に鉇・刀子が複数の埋葬施設から出土している場合、１～２基が左側配置になっており、基本的に右側配置となっている。一方、第２－３群のみが特異で、左右配



第５図　遺跡内における副葬品の配置および埋葬施設の配置状況

（縮尺１/500、註（5）の各報告書より一部改変）

（１．山崎八ヶ尻墳丘墓、２．徳永川ノ上遺跡Ｅ地区、３．金居塚遺跡、４．岩屋６・７号古墳）

（棺部分の黒塗りが棺内出土、棺周囲の黒塗りが棺外出土を示す。）

置が判明している埋葬施設の中では 18 号墓の刀子を除くとすべてが左側配置となっている。鏡をもつ 40 号墓はこの第２－３群に位置している。また、この時、棺外には第２－１群と第４群の右側配置の器種のみに見られる。

⑤金居塚遺跡（第５図）

当遺跡は、その埋葬施設の配置から４つの墓群に分けることが可能である。これらの

墓群はそれぞれ、副葬品の有無あるいは器種により区別されていることが想定される。この中で副葬品の左右配置は、既述のように棺内外の位置により区別されている可能性が高い。

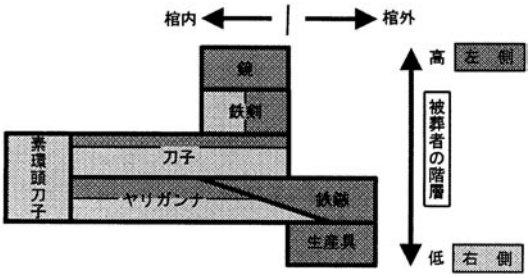
⑥岩屋古墳６・７号墳（第５図）

当遺跡では、中心的な位置を占める埋葬施設に鉄剣が左側に配置されており[(11)]、６号墳の２次的埋葬施設である「２号主体部」において、刀子が右側配置されている。

４．左右の配置原理とその意義について

前節での検討から、左右の配置は基本的に、副葬品の器種によって決定されていることがわかる。と同時に、これらの器種は、副葬される埋葬施設の遺跡内における位置によって決定されていると考えることができる。これは、はじめの仮定からすると、階層と副葬品の左右配置とが関係している可能性が高いことを示していると考えられる。このことから、鏡や鉄剣などを副葬品として持つ、遺跡内の中心的な位置を占めると考えられる埋葬施設においては左側配置が卓越しているのに対して、それ以外の埋葬施設あるいは墓群では、素環頭刀子や刀子、鉇などのような右側配置を基本とする器種が多くみられると解釈することができよう。この中で、刀子と鉇は、埋葬施設の位置と左右の配置が対応しないものがみられる。これらの刀子・鉇が左側配置をとる埋葬施設は墓群内に１～２基程存在し、他は右側配置になることが多いことから、刀子・鉇における左側配置には特別な意味があったと考えられよう。このことは、単に左右の配置が利き手や性別などの理由により決定されていない可能性が高いことを示している。また、数的に少ない鉄鎌などの生産具が左側に配置される場合が多いことを考えると、これらの生産具の副葬においても左右の配置には特別な意味があったことが想定される。但し、遺跡内において、数的に少ない鉄鎌などの生産具をもつ埋葬施設の位置は、鏡・鉄剣などを除いた複数器種が混在している墓群に属していることが多く、また棺外配置となっている点において、刀子や鉇をもつ埋葬施設がそれぞれの器種で墓群を形成しているような状況とは異なっている。また、鏡・鉄剣および前述の生産具などのあり方などを考慮すると、これらの墓群は一定の決まった集団により構成されていると考えることができる。すなわち鏡その他の器種をもつ中心的集団、刀子をもつ集団、鉇をもつ集団、各器種が混在する集団（生産具を含む）である。また、これらの集団は器種組成や副葬品配置などから、鏡⇒刀子⇒鉇⇒混在（生産具を含む）の順で集団に階層差があることが予想される[(12)]。これらのことから、基本的に左側配置が階層的に優位な立場にあると考えられる。したがって、刀子や鉇を副葬品の主体とする墓群において、前述のような左側配

置は、墓群の中でも階層的に上位の被葬者であったと想定できよう。ここで問題となるのは、鉄鏃の意義であるが、豊前地域で広く見られる鉄鏃は、いわゆる平根系といわれる、透穴をもつ大型の非実用的と考えられる例が多いことから、左側配置となることにも肯首できる。



第６図　豊前地域における左右配置の概念

このような器種による左右の配置原理が存在するが、一部では棺内外において左右の配置が逆転する場合がある。このような場合には、棺内は右側、棺外は左側に配置することが多い。このことは、単純に左側が階層的に優位であるという考えに対して疑問をもたせるものである。しかし、既に述べたように、鏡・鉄剣が棺外配置になることはないので、棺外の左側配置が階層的に優位ということはできないであろう。むしろ、１遺跡１点程度の生産具などが棺外配置されることなどから、階層原理とは違った背景をもつと考えることができる。これは、鉄鏃においても同様で、郷屋遺跡のＢ地点Ｄ－１石蓋土壙墓例は骨鏃型鉄鏃であったり、徳永川ノ上遺跡Ⅵ－ 42 号墓例は釣針と一括に近い状態で出土していることからも、一般的な意味とは異なる意味を付加されていたことが想定可能である。このような状況から、棺外の左側配置では祭祀的性格が付加されていたのではないだろうか。[13] しかし、遺跡内における埋葬施設の位置からみて、このように棺外に配置する埋葬施設の被葬者が階層的に高い地位にあったとは言い難い。

以上のように、左右の配置において最も大きな要素は、遺跡内における埋葬施設の位置あるいはそれが属する墓群によるということを明らかにするとともに、左右の配置では、特に左側配置が階層的に優位であることを指摘した。このような階層原理に依存したと考えられる左右配置は、王墓の存在にみるような階層分化が指摘されている北部九州地域の遺跡においてもみられるようであり、特に鏡を特別視し左側配置する場合があり、その影響も考えられる。[14] これらは、豊前地域において、左右の配置における相違が被葬者（集団）の階層差を背景として存在する可能性を補強するものと考える。このような豊前地域における左右配置原理および背景としては第６図に示すような概念でとらえることが可能であろう。[15] したがって、集団墓においては、鏡あるいは鉄剣などを有する中心的集団は首長および首長に関係する集団であり、刀子・鉇・素環頭刀子以外の工具・農具・漁具などの生産具を含む各器種が混在する集団は、一般構成員であると考えることができる。刀子と鉇に関しては、それぞれ属する集団が分かれる傾向があることから、共同体の中において何らかの特化した集団であった可能性があると考えられよう。

ここでは､それがどのような役割をもった集団であったかを述べることはできないので、今後の課題としたい。また、以上のことは基本的に棺内配置の例から考えられる状況であり、棺外配置における左側配置については、これは階層というよりもむしろ祭祀的な性格を付加された副葬品であると想定される。但し、本稿の目的は、棺の内外がもつ意味を明らかにすることではないため、これを論証することはここではできない。これも今後の課題である。

以上のように副葬品配置に関して右と左の２者は階層差において対立していることを指摘した。このような状況は、前述の北部九州地域のように、対象とした豊前地域以外においても確認でき、さらに後続する古墳時代においても見出せる可能性があることを最後に指摘しておきたい。

本稿は 2002 年度１月に広島大学大学院に提出した修士論文の一部を元に、改めて書きなおしたものである。本稿の作成にあたっては、広島大学大学院考古学研究室の先生方および先輩・後輩諸氏に多くの意見を頂きました。また、川越哲志先生と古瀬清秀先生には修士論文の作成段階から度重なるご指導を頂きました。末筆になりましたが、記して感謝の意を表します。また、ご病気のため入院し、修士論文の審査をお願いできなかった河瀬正利先生に改めて小稿を献呈するとともに、先生の今後のご活躍とご健康をお祈りします。

2002 年５月８日稿了

註

(1) 今尾文昭「古墳祭祀の画一性と非画一性」(『橿原考古学研究所論集第六』吉川弘文館, 1984 年, 111 ～ 166 頁)
小林行雄『古墳文化論考』(平凡社, 1976 年, 157 ～ 178 頁)
寺沢知子「鉄製農工具副葬の意義」(『橿原考古学研究所論集第四』吉川弘文館, 1979 年, 347 ～ 373 頁)
光本順「古墳の副葬品配置における物と身体の分類およびその論理」(『考古学研究』, 第 48 巻, 第１号, 考古学研究会, 2001 年, 96 ～ 116 頁)
用田政晴「前期古墳の副葬品配置」(『考古学研究』, 第 27 巻, 第３号, 考古学研究会, 1980 年, 37 ～ 54 頁)

(2) 福島孝行「弥生時代における鉇の副葬作法について(１)」(『京都府埋蔵文化財情報』, 第 78 号, (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2000 年, 11 ～ 16 頁)
福島孝行「弥生時代における鉇の副葬作法について(２)」(『京都府埋蔵文化財情報』, 第 81 号, (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2000 年, ９～ 16 頁)

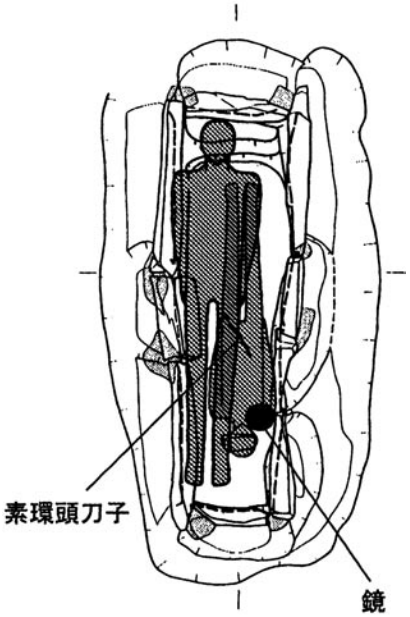
(3) 高倉洋彰「右手の不使用―南海産巻貝製腕輪着装の意義―」(『九州歴史資料館研究論集』１, 九州歴史資料館, 1975 年, １～ 32 頁)
轟次雄「前期古墳における副葬品の左右配置」(『古文化談叢』, 第 30 集 (上), 九州古文化研究会, 1993 年, 303 ～ 321 頁)

(4) 本稿でいう左右とは、被葬者に対しての左右の位置である。

(5) これらの遺跡の報告書は以下の通りである。宇野慎敏『山崎八ヶ尻墳墓群』((財) 北九州市教育文化事業団埋葬文化財調査室, 1994 年)
栗山伸司編『郷屋遺跡』((財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, 1986 年)

柴尾俊介編『高津尾遺跡４』（(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室,1991年）
田頭喬・山中英彦「北九州市、長行の郷屋古墳―田頭喬考古資料整理報告２―」（『古文化談叢』，第16集，九州古文化研究会，1986年，159～171頁）
長嶺正秀編『岩屋古墳群』（苅田町教育委員会，1999年）
飛野博文編『穴ヶ葉山遺跡』（大平村教育委員会，1993年）
飛野博文編『金居塚遺跡Ⅱ』（福岡県教育委員会，1997年）
柳田康雄編『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』（福岡県教育委員会，1996年）
この他に鉄器が副葬品としてみられる遺跡としては、高津尾遺跡16区北地区・高槻遺跡・高島遺跡・長行小学校遺跡・前田山遺跡・下稗田遺跡・竹並遺跡などがある。

(6) ここでは詳細に述べる余裕がないが、棺の規模（棺長と棺幅）の分布によって棺長125cm以下の小型棺、棺長125～150cmの中型棺、150cm以上の大型棺とに分けることができる。さらに土器棺を加えて、４分類が可能であると考えている。これらは現代人の身長を参考とすると125cm以下が乳幼児、125～150cmが小児、150cm以上が成年にそれぞれほぼ対応していると考えられる。



第７図　徳永川ノ上遺跡Ｅ地区４号墳丘墓４号棺の副葬品配置想定図
（縮尺１/50、註 (5) 文献より一部改変）

(7) 棺形態が何を示すかは問題であり、階層差を表す可能性もあるが、穴ヶ葉山遺跡のように埋葬施設のほぼすべてが同一の棺形態であることなどから、今回はこの可能性は考えていない。出自については、木棺における形態の違いが出自による可能性を指摘されていることなどから、今回は棺形態が出自を示す可能性があると考えた。
福永伸哉「５．木棺墓」（『弥生文化の研究』，８祭りと墓と装い，雄山閣出版，1987年，117～126頁）

(8) 穴ヶ葉山遺跡では、棺内外で左右の比率が逆転している。

(9) ここで問題となるのは素環頭刀子の配置であるが、枕石の配置などから被葬者との関係は第７図のような配置であったと考えている。

(10) 註 (7) に同じ。

(11) 岩屋古墳６号墳では、「１号主体部」は墳丘の中心に位置していないが、鉄剣を副葬品としてもつことから中心埋葬と考えることができる。

(12) 本稿では詳しく述べなかったが、刀子が鏡と比較的多く共伴することや、１つの埋葬施設内において刀子が棺内、鉇が棺外に配置される例があることなどから、刀子の方がランクが高いと考えられる。

(13) 棺内外の差は、註（12）で述べたような鉄器のランクによる可能性もあるが、本稿ではそのような視点での分析は行っていないので明らかにすることはできなかった。

(14) 立岩遺跡、吉武樋渡・大石・高木遺跡、二塚山遺跡、吉野ヶ里遺墳丘墓などにおいても、遺跡内における埋葬施設の位置および副葬品により左右の配置が決定している面が認められる。この中で、吉武高木遺跡で、埋葬施設の位置などに加えて棺形態においても配置に差が存在するとともに、右側が優位となっている点で他の遺跡とは異なっているようである。特に、階層的に上位に位置すると思われる被葬者がもつ鏡が左側に配置される場合が多いようである。これらは地域的・時期的に幅があるので、変遷や北部九州地域と他地域の関係などの詳細については、また別の機会に検討したい。

(15) この概念は、豊前地域に適用できるものであり、北部九州地域や他地域では異なる可能性は大きいと考えられる。